

## 第60回 中部社研定例講演会

開催日：2024年2月16日

会場：TKPガーデンシティPREMIUM名古屋新幹線口7階会議室（WEB同時配信）

今回は、日本オリンピック委員会理事の谷本 歩実 氏（柔道元日本代表）、愛知県立名古屋盲学校教員の廣瀬 誠 氏（視覚障害者柔道元日本代表）のお二方を講師にお迎えし、「2026年愛知・名古屋アジア・アジアパラ競技大会」をテーマにご講演いただきました。以下は、その内容をまとめたものです。

（文責事務局）

演題：私たちの挑戦

講師：谷本 歩実 氏



愛知県出身。医学博士。小学3年生で柔道に出会い、20年間の現役生活を送る。2004年アテネ五輪、2008年北京五輪で柔道五輪史上初のオール一本勝ちで2連覇。2010年に引退し、2013年～2017年まで全日本ナショナルチームのコーチを務める。

アスリートのコンディショニングの観点から、医学・栄養学・心理学を研究。また、フランスを留学拠点に、諸外国のスポーツ事情を学ぶ。2018年国際柔道連盟（IJF）殿堂入り。現在、日本オリンピック委員会理事。

ご本人の要望によりホームページでの公表を控えさせていただきます。

演題：一度きりの人生 どうせだったら楽しもう

講師：廣瀬 誠 氏



愛知県出身。高校生の時、病気で視覚障害となる。組んでしまえば障害前と同じようにできる好きだった柔道が当初の心の支えとなった。  
アテネ、北京、ロンドン、リオのパラリンピック4大会出場。「障がいはい不便だけど、不幸じゃない」ことをその姿で子供にみせたいという思いで最後のリオに臨み、アテネ以来となる銀メダルを獲得し引退。障害は失うものだけでなく、得られるものも大きいと感じ、教職の傍ら、パラスポーツの普及・啓発、障害理解促進の活動を行っている。  
現在、愛知県立名古屋盲学校教員。

皆さんこんにちは。  
視覚障害者柔道の廣瀬  
です。まず最初に、今  
日こうしてお話する機

会をいただきました中部圏社会経済研究所の方々、そして今日お話を聞いていただける皆さんに感謝したいと思います。谷本さんのお話ではありませんけれど、当たり前ではなくて有り難いです。

谷本さんには何度かお会いしたことがあるのですが、講演を聞かせていただくのは初めてで、すごいですね、あっという間にこの場を支配して。すごく勉強になりました。その後でしゃべる私は超プレッシャーがかかっているのですけれど。試合のときはゾーンだか何だかわからなかったのですけれど、今ゾーンに入りたいです（笑）今日は、よろしくお願いします。

私自身が視覚障害ということもありまして、最初に視覚障害についてお話しさせていただいて、その後、共生社会とかダイバーシティ・アンド・インクルージョン、共生社会とはいうけれどといったお話。それから、そこにパラスポーツが関わられるのではないかというお話。そして最後に、それを踏まえて2026年に愛知・名古屋で開催されるア



ジア大会・アジアパラ大会に期待すること、という形でお話をさせていただこうと思っております。

## 視覚障害について

私自身、高校のときに病気で視覚障害になりました。私は今、愛知県立名古屋盲学校で教員をやっておりまして、そこは生まれつき目が悪い方もいれば、病気や事故で途中で視覚障害になった方もいて、人数は少ないのですけれども、幼稚部の子から、上は50歳、60歳の方までいらっちゃって、職業自立のためにあんま・マッサージ・しんきゅうの勉強をする方がいます。

見え方にもいろいろありまして、私も目が悪くなって高校を卒業してから盲学校に入ったのですけれど、弱視といい私はぼんやり見えます。盲学校には弱視の方も結構います。全く見えない全盲というの分かりやすいかと思うのですけれども、弱視はなかなか理解されづらいところもあって、「弱視のいろいろな見え方」ということで、資料の図1を見てください。これはみんな視覚障害者柔道の選手なのですが、実はこれはビジョングラム・プロジェクトといって、これからの共生社会とか障害者理解のところで、わかりづらい弱視の見え方を可視化する、視覚障害を可視化する。字面が面白いですが、そういうような取り組みで、視覚障害者柔道の選手の眼科的なデータを提供して作った名刺です。表に名前が書いてあって、裏にその人の見え方が視覚化された名刺です。

私の場合は、中心がごそっと見えない形になっています。名刺の裏面にあるような、こんな感じで見えています。実際には、両眼視だったり昔見えていた部分の補正とかが脳の中で入るみたいな



図1 弱視のいろいろな見え方

ので、私としてはもうちょっと見える感じがするのですけれど、真ん中が見えないです。一方、兼田選手は、視野が極端に狭いです。でも、視野に入れば、かなりクリアに見えます。兼田選手は新聞も見ることができます。工藤選手もやはり視野が狭いのですけれども、兼田選手よりは視野が広い。でも、真ん中はぼやけています。

こんな感じで一括りに弱視といっても見え方がかなり違うので、日常生活で不便な点、配慮してほしい点が違ったりしています。私なんかは真ん中がぼやとして見えないので、買い物にいてスーパーでパックの肉を見ていたりすると臭いを嗅いでいるように思われるらしく「腐ってないです。新鮮ですよ」なんて言われてしまいます（笑）

そんな感じで、弱視でもかなり状況が違うということですね。これは視覚障害に限らず、肢体不自由の方、聴覚障害の方でも、同じ括りでも障害の程度、レベルはグラデーションなのではないかと思うのです。坂本光司さんの「日本でいちばん大切にしたい会社」というシリーズがあって、私は好きでよく読むのですけれども、7巻だったかな、書いてあったのですけれども、視覚障害は障害者の就労の中でもかなり難しいといわれているのです。障害者雇用率は今2.3%で、令和6年度は2.5%と段階的に上がっていくと思うのですけれども、その中で視覚障害者はなかなか難しいという現状があります。でも、全く見えないわけではなく、このようにいろいろな見え方の人がい

て、それぞれでできるところが違うということを知っていただくことによって、就労の幅が広がるのかなと思うと、やはりいろいろな人に障害を知っていただくことが大事なのではないかと思っております。

今日のテーマは「一度きりの人生 どうせだったら楽しもう」ということですが、私自身、視覚障害になって最初は不便だし、不幸だと思ったこともあったのですけれども、いろいろな経験をして、スポーツと出会って、パラリンピックにも出場して、出会いもあって、障害は不便だけど不幸ではないと思えるようになりました。「一度きりの人生 どうせだったら楽しもう」というのは、これは健常者も障害者もみんな同じなのではないかと思えます。人生一度きりですし、その一度きりの人生をどうせだったら楽しみたい。みんなが公平に権利もあれば義務も負うというのが、共生社会が実現した形なのかなということで、そういう願いも込めて、こういうタイトルにさせていただきました。

## 共生社会とはいうけれど

共生社会とはどういう社会なのだろうかとなったときに、JPC委員長の河合純一さんはパラリンピックの水泳で何度も金メダルを取っていて、日本のパラスポーツをけん引する中心的な方なのですが、この方が共生社会はこんな社会だと面白い

例えをしているので紹介させていただきます。ミックスジュースではなくフルーツポンチだ、というのです。ミックスジュースはフルーツをミキサーに入れてかき混ぜて均一にします。そのような平均化して均一にしてしまった社会ではなく、フルーツポンチだと。何が入っているのでしょうか、リンゴとかミカンとか桃、キウイとかパイナップルなど、いろいろなものが角切りにして入っている。それぞれ個性があり、それが混ざり合っているわけではなくばらばらでありながら、ひとつの器に入っている。これが共生社会を実現した状態だという話をされて、なるほどと思いました。

少し話が変わりますがけれども、私は勝手に“日本の四大名字”とっているのですけれど、日本で多い名字、トップ4。この中にもいらっっしゃいますかね、鈴木さん、佐藤さん、田中さん、高橋さん。これが日本で一番多い4つということで、四大名字と勝手に呼んでいます。なぜ突然こんな話をしたかという、この四大名字、年によって多少違うかもしれないですけども、人口比でいうと大体7.3%か7.4%くらいらしいです。この数字は、実は日本の障害者数のパーセンテージと大体同じくらいなのだそうです。日本の障害者数も7.3%とか7.4%、930万人ちょっとといわれています。同じくらいなのです。

皆さんの人間関係を思い浮かべていただいたときに、皆さんの出会った佐藤さん、鈴木さん、田中さん、高橋さんと同じくらいの数だけ障害者の方と出会っていますか？「同じくらいだよ」と言われると話が終わってしまうのですけれども、聞いてみると大概、障害者の知り合いが少ないという方のほうが圧倒的に多いです。同じくらいのパーセンテージなのですけれども、実際にはそんな感覚はない。この差は何かというところで、共生社会を目指す、ダイバーシティ・アンド・インクルージョンを目指すといわれて、そういう流れができてはいるけれども、実際にはまだそこまでフルーツポンチの状態ではないと思うのですね。それは、日本の社会に何らかのバリアがあるからなのかな、と思います。

例えば車椅子ユーザーにとっての段差とかスロープの存在かもしれないし、多目的トイレの数とか場所の問題かもしれない、視覚障害者でいえば点字ブロックが整っていないかもしれない。私だとタッチパネルが結構不便です。飲食店などで「ご注文はタッチパネルでお願いします」と言われますが、わかりません。クレジットカードでの支払いも、ボタン式のものはいいのですが、タッチパネルだと数字がランダムになったりすると、もうお手上げです。あと、銀行のATMも、私の視力だと何とか見えるのですが、画面に顔を近づけすぎると「画面に物を置かないでください」とATMに言われて、すみませんという感じなのです（笑）そういう物理的なバリア。

あと、今はだいぶ少なくなってきたと思うのですが、心のバリアというところで車椅子の方とか白杖の方がいると、小さい子が「あれ何？」と聞くと「見ちゃダメ」と親御さんが言う。こういうことがあると、障害者の方も街に出づらいなと思ってしまうこともあるかもしれません。こういうバリアを解消していくためには、障害者も積極的に街に出ていく必要があるし、障害の状況を健常者の方に知ってもらい、理解していただく、心のバリアの除去も必要ですし、それと同時に並行で施設の整備、制度も変わっていく必要があると思っています。

## 共生社会の形成にパラスポーツが関われるのではないか

障害者のスポーツの最高峰が、オリンピックと並ぶパラリンピック。このパラリンピックの目的には「共生社会の形成を促進する」ということがあります。そのパラリンピックに出場するパラリンピアンには、その目的を達成するための次のような4つの中心的な価値があります。

- (1) Courage (勇気) : マイナスの感情に向かい乗り越えようとする精神力。
- (2) Determination (強い意志) : 困難があっても諦めず限界を突破しようとする力。



(3) Inspiration (インスピレーション) : 人の心を揺さぶり駆り立てる力。

(4) Equality (公平) : 多様性を認め、創意工夫すれば誰もが同じスタートラインに立てることを気づかせる力。

コロナの影響で1年延びたり無観客になってしまったりということもありましたけれども、東京2020が開催決定してから実際に開催されるまでのところで、東京都では小学校とか中学校でパラアスリートを招いてのパラスポーツ体験とか、障害者理解を含めた出前授業なんかが盛んに行なわれました。私も呼んでいただいたりして、そういうところに参加させてもらったことがあるのですけれども、ほかにもいろいろな取り組みが行なわれました。その数年間でかなり変わったなと、私も肌感覚として感じました。

私が視覚障害になって間もない頃、20年くらい前です、白杖を持って東京を歩くと、私は地図が見えないので人に聞いたりするのですね。何となく人影が見えるので「すみません」と声をかけると、私を避けて早歩きで行ってしまう人もいたのですが、最近は白杖を持ってどっちへ行ったらいいのか迷っていたりすると、声をかけてくれる人がすごく増えました。しかも若い方が多いです。これはやはり、何年間にわたるパラリンピックに向けての取り組みが形になってきているのかなと感じています。もちろんパラスポーツだけが共生社会の形成を促しているのではなく、いろいろな取り組みの結果だとは思いますが、実際に変化が起こっています。ちなみに、昔、声をかけてもなかなか立ち止まってくれなかったときに、確実に立ち止まってもらえる方法があって、皆さんには役に立たない知識をしゃべりますけれども、男女のカップルに話しかけるのです。そうすると、「道を教えてください。困っているんです」というと、男性、女性のどちらかに話しかけても必ず丁寧に対応してくれるのですね。女性は優しいところを見せたいということで丁寧に対応してくれるし、男性も困っている人に不親切にするところを見られたくないから丁寧に対応してくれ

ます。カップルに話しかけると、私の経験からいくと百発百中です。でも今は、そんなことをしなくても立ち止まってくれる人が多くなって、助かるようになりました。

## 2026年愛知・名古屋アジア・アジアパラ競技大会に期待すること

共生社会が進んだといわれる一方で、東京オリンピック・パラリンピックの取り組みについて、東京は盛り上がったけれども、コロナ禍もあったのか地方ではそこまで盛り上がりませんでした。地方と東京との温度差がかなりあったという話も聞いています。そこで、2026年の愛知・名古屋でのアジア・アジアパラ競技大会の開催です。オリンピック・パラリンピックに次ぐ、4年に1回行なわれる大きな大会であるアジア・アジアパラ競技大会は、地方から全国に向けて共生社会の形成を促す大きな力になり、それを愛知・名古屋から発信できる貴重な機会かと考えています。

図2に、2026年のアジア競技大会とアジアパラ競技大会のスローガン、エンブレム、大会コンセプトを載せさせていただきました。スローガンもエンブレムもアジア競技大会とアジアパラ競技大会に親和性を持たせてありますし、コンセプトも見ていただくとわかると思いますが、一緒ですね。パラリンピックのほうはパラスポーツという側面に対して少し加えられている部分がありますけれども、こんな感じになっています。

アジア・アジアパラ競技大会に期待すること、願うことですが、私にはこの2026年の大会には2つの成功の形があるのかなと思っています。1つ目の成功は、スポーツ大会でありますのでアスリートファーストの視点。愛知・名古屋に来て試合をした選手が海外の選手も含めて最高のパフォーマンスを発揮できること、また、試合だけではなく、おもてなしがよかったから今度は一私人として愛知・名古屋に来たいと思えるような満足度の高い大会にできることも、ひとつの成功の形だと思っています。

2026年 アジア・アジアパラ競技大会

<p>第20回アジア競技大会</p>  <p>20th Asian Games Aichi-Nagoya 2026</p> <p><b>IMAGINE ONE ASIA</b> ここで、ひとつに。</p>	<p>第5回アジアパラ競技大会</p>  <p>5th Asian Para Games Aichi-Nagoya 2026</p> <p><b>IMAGINE ONE HEART</b> こころを、ひとつに。</p>
◎アスリートファーストの視点	◎アスリートファーストの視点 パラアスリートが最高のパフォーマンスを 発揮できる舞台を用意
◎既存施設の活用	◎既存施設の活用 ★必要なバリアフリー対応も行いながら、 既存のスポーツ施設の活用を中心に展開 し、開催時及び開催後の経費を低減
◎先端技術の駆使	◎先端技術の駆使 最新技術を導入し、パラアスリート等に快 適で安心・安全な競技・滞在環境を提供
◎伝統と県民・市民性に触れるおもてなし	◎伝統と県民・市民性に触れるおもてなし ★ボランティアと一体になり、地域を挙げ て大会を盛上げ
◎アジア競技大会の開催を誇りに、さらなる スポーツ文化の普及へ貢献	◎アジア競技大会・アジアパラ競技大会の 開催を誇りに、さらなるスポーツ文化の 普及へ貢献 パラアスリートの競技力向上を支援すると ともに、パラスポーツを楽しむ文化を普及

※アジア競技大会と共通のコンセプトとし、アジアパラ競技大会の特性を加える。

図2

もう1つは、この大会を契機に愛知・名古屋に何を残せるかというところですね。よくレガシーといわれるものですが、何を残せるかというところかなと思います。大会自体は2026年で終わるわけですが、2030年、2040年、2050年を見据えて何が残せるか。それは施設、設備というハード面かもしれませんが、人の心のバリアを変えていくところかもしれません。今、健康寿命の延伸ということが言われていますので、そういうところとか、あと、企業でも健康経営なんていうキーワードが言われていますけれども、そういうところに寄与することができるかもしれませんし、バリアフリーが進んで住みやすい愛知・名古屋になるというのも、ひとつかもしれません。

私は、障害者が住みやすい社会は誰もが住みや

すい社会だと思っています。皆さんも年を重ねれば誰もが膝が痛くなったり、腰が痛くなったり、目が見えにくくなったり、耳が聞こえにくくなったりして不便なことが多くなります。ですが、すでに障害を持っている方がその地域で住みやすい環境であれば、その方たちにとっても住みやすい。結局、障害者のことを考えるということは、将来の自分のことを考えること、自分ごとであるということなのだと思うのです。そういうことを大会をきっかけに作っていきけるといいのかなと思います。

1964年、最初の東京オリンピックが開催されましたけれども、そのとき第2回のパラリンピックが東京で行なわれました。すごく規模の小さいものだったのですが、そのときに尽力された

のが医師の中村裕先生です。この方はもう亡くなられておりますが、日本パラリンピックの父と称される方です。この方の尽力で日本でパラリンピックが開催されました。そのときに、中村先生は衝撃を受けたのです。何かというと、今まで日本の障害者は1つの場所で何の楽しみもなく過ごす方が多かったのですけれども、パラリンピックに来た海外の選手は自分たち自身の生活を楽しみ、自分の障害を受け入れて、なおかつ、その国で自分の経済的な自立のために働いて、家族も持っているということを聞いて、かなりショックを受けた。その後、中村先生は、パラスポーツの普及、啓発だけではなく、障害者もちゃんと働いて、自分で生活できて、税金を納められる、そんな日本にしたいのだということで、日本で初めて障害者の就労施設「太陽の家」を作られました。

何が言いたいかというと、パラスポーツはそれをきっかけに社会を変えていく力を持っているのではないかと考えています。ちょっと大げさな話かもしれませんが、2026年のアジア・アジアパラ競技大会でどう変わるかではなくて、多くの方に関わってもらってこの大会を利用してどう変えたいか、どうしていきたいかだと思うのです。先ほど谷本さんのお話で、カヌーの予選会場がお客さんでいっぱいだったと言われていたのですが、パラリンピックは集客力が低いのが現状です。一部の人気スポーツはそうでもないのですけれども、まだまだ知名度が低い。これはパラスポーツ側も魅力を発信していくというところで課題もあるのですけれども、スポーツ関係者や家族だけではなく違う分野の方にも知っていただいて、一緒に何ができるかを考えていけると嬉しいなと思っています。

そういう意味で、今日ここで話を聞いていただいて、関心を持っていただく機会をいただいたことは本当にありがたいと思っています。私も谷本さんとともにアジア・アジアパラ競技大会のアスリート委員会の委員として、まずは多くの方に知っていただくこと、気運醸成のためにアスリート委員会として一緒に活動していきたいと思って

おりますが、皆さんにも関わっていただいて、「あの大会があってよかったよね」とスポーツに関心のない人にも思ってもらえるような大会にできればなと思っています。これからもよろしくお願ひします。

短かったですけれども、私の話は以上です。ありがとうございました。

## 【質疑応答】

Q1：過去にアテネ、北京、リオなどの大会に出られて、街も歩かれたと思うのですけれども、日本と違ってダイバーシティ、アンドン、インクルージョン、共生社会が進んでいるなど感じられたことがあれば。また、日本ならではのいいところがあればお聞きしたいです。

A1：私が印象に残っているのは、リオデジャネイロパラリンピックのときですけれども、選手村も車椅子ユーザーの方とか視覚障害の方にとってのバリアだらけというか、段差もめちゃくちゃありましたし、点字ブロックがないところがたくさんあったのですけれども、これは国民性なのかわからないのですけれども、私はポルトガル語が分からないのですが、積極的に話しかけてきたり、車椅子が段差で動けないでいると寄ってきて手伝ってくれるのです。ソフト面というのですかね、心のバリアが全然ない感じでした。日本人は奥ゆかしいというところで、「こんなふうには聞いてはだめなのかな」とか「言ったらだめなのかな」とか「どう思われるかな」というところで、何かしてあげたいと思ってはどうしていいかわからないという方も結構いらっしやると聞いたのですけれども、友達が困っていたら「どうした？」と聞いたりしますよね。ブラジル人の方はそれと同じような感覚で「何かやろうか？」みたいな感じで、そういう感覚はすごいなと思いました。日本人はもともと気遣いの気持ちはあるので、先ほどの挑戦ではありませんけれど、ちょっとした心の変化があるだけで、障害者にとっても外国人にとっても

住みやすい社会を作ることができる、そういう潜在的な力はあるのではないかなと私は思っています。

**Q 2**：今回のアジアパラ大会では選手村を作らないということで、ホテルを利用するというのだと思うのですが、ホテルを利用するとなると特にパラアスリートの方にとってはバリアフリー化がなかなか進んでいかないのかなと思ったのですけれども、今のお話からするとハード面で手が回らないのであれば、マインドを変えるのもひとつのレガシーになるのかなと。廣瀬さんのおっしゃるように、日本人は基本的には親切なのですけれども、一方でかなりシャイというか、外国の人に比べると「英語ができないので、話しかけられません」という雰囲気を持ってしまうことが多いと思うのですけれども、これを機会にハード面で難しいところはハートでカバーするようなキャンペーンをやっていくと、名古屋とか愛知は外国人にもハンディのある方にも優しい街というようなレガシーになるのかなと気づきまして、我々のような研究団体もそういうことを少しずつでもやっていけたらいいなと思いました。そういう解釈でよろしいでしょうか？

**A 2**：今回の一番の特徴として既存施設を利用して、選手村がないというところで「大丈夫かな…」と不安を感じているという意見も聞きます。でも、そういうふうに決まっている以上は「どうせだったら楽しもう」ではありませんけれど、どうせだったらいいものにしたいなというところで、どうすればいいかを、谷本さんたちとともに皆さんも含めて一緒に考えていければと思っています。逆に選手村がないことのメリットもあると思うので、アジア・アジアパラ競技大会のひとつの形としてそういうのを見せることができると、成果として大きなものになるのではないかなと思っています。

アクセシビリティ・ガイドラインも作られていて、ああいうものを参考にハード面も少しずつ変えていっていただけたところもあると思うのです

けれど、限界もある。先ほどお話のあったように、そこをソフト面、心のバリアを変えていくことがレガシーになるというのは、そうだなと思っています。何でもソフト面でカバーできるじゃないかという話が変わってくるかもしれないですけど。人の心が変わると、障害者を取り巻く環境も変わるし、健常者を取り巻く環境も変わっていく。障害者が街に出ることで社会は変わると思っているので、2026年に期待しています。よろしく願います。ありがとうございました。

**Q 3**：前回リオでも銀メダルを取られていて、どのような練習をされているのか。谷本さんとか現役のときは金メダルを取るために生きているというくらい、限界までやっていたらっしゃるのだろうなと思っているのですけれども、どれくらい練習しているかは人それぞれだと思うので、廣瀬様はリオで取られる前にどれくらい練習をされたのか。お仕事をしながらだと思うのですけれども、どのように練習されていたのかお聞きしたいと思います。

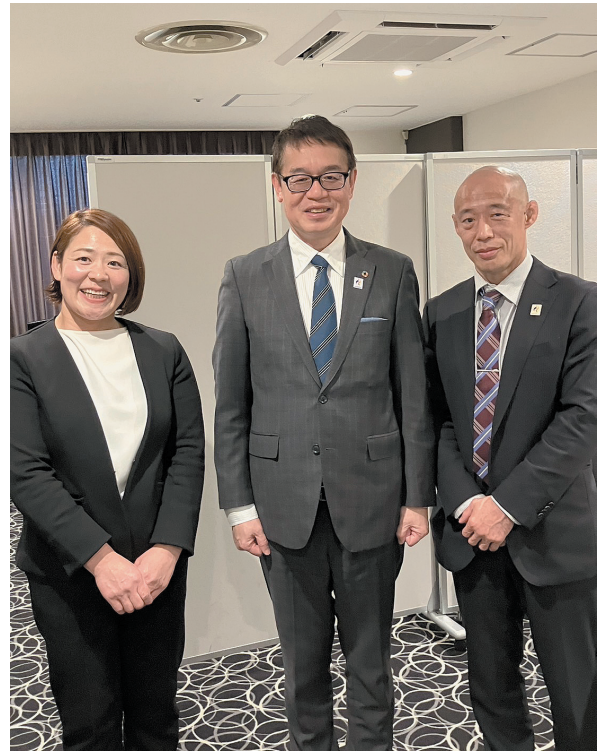
**A 3**：パラアスリートは、オリンピックに出る選手の環境と少し後れた環境にあるのかなと思っています。今のパラアスリートは、実業団じゃないのですけれども、アスリート就職という形で、競技に専念できる選手が多くなっているという印象があります。本当にこれは社会が変わってきたなというところで嬉しいところなのですけれども、私が現役だったときはまだまだそういう仕組みはなく、ほとんどの選手は働きながら競技するという形でした。私の場合は、教員をやりながら競技をしていたということで、練習できる時間自体制限があるので、1日1時間半とか2時間しか柔道はできないのですけれども、夜、目が悪いので1人で走るの難しいので、練習したあと公園で懸垂してみたり、縄跳びしてみたりしていました。こんなおっさんが1人で公園でハアハアやっている、一回警察から質問されたことがあります。これが職質かと思ったのですけれど（笑）

あとはすき間の時間ですね、仕事の合間だった



り家にいるとき、腕立てとか腹筋とかスクワット。筋トレはそういうところですか。あとは、何でもそうなのかもしれませんが、自分の目標があったときに課題は何か、自分の強みは何か、弱みは何か、強みを伸ばすためには、弱みをなくすためにはどうすればいいかということで、限られた柔道の練習の時間の中で、ただきつい練習をするのではなくて、その目的を達成するための練習を考えて練習していました。そんな感じです。

視覚障害者柔道の練習は、普段は大学だったり高校だったりの道場で健常者に交じって練習します。組んでいただければ普通の人と一緒にできるので、ユニバーサルなスポーツかなと思っています。視覚障害者柔道を広めたいので、もし周りに視覚障害の方がみえましたらぜひ紹介していただければと思います。本日はありがとうございました。



左から谷本氏・宮本代表理事（当財団）・廣瀬氏